ぷにぷに王国の迷い人

ろーりんぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぷにぷに王国の迷い人

【Ｎコード】

Ｎ３４３６Ｓ

【作者名】

ろーりんぐ

【あらすじ】

ある日あなたの目の前に襖が現れたらどうしますか？何の躊躇いも無く開けちゃった主人公の運命はいかに！ぷにぷにを愛する、ぷにぷにの、ぷにぷにによる、ぷにぷにの為の物語。合言葉は「ぷに！」

1．いきなり目の前に襖が現れたら。（前書き）

スランプを脱するために衝動的に書いたものです。大した中身はありませんので、頭空っぽにして読むことをお勧めします。

1．いきなり目の前に襖が現れたら。

「ん？　……何だこれ？」

学校から帰ってきて、ふと部屋の違和感に気付いた私。
一体この違和感は……と思って、壁に目をやった私はその違和感の正体を見つけた。

うん、これあれだ。襖だ。
しかもあの国民的アニメに出てくる青いネコ型ロボットが寝床に使ってる押入れの襖と同じ模様だ。
あれ？　でもおかしくね？
今朝起きて見た時は何も無かったよね？　ただの壁だったよね？
第一、こんな襖私の趣味じゃないし、部屋のインテリとかにも不似合いだし、ださくね？
これだったらどこでも〇アの方がまし……いやいや、やっぱりどっちにしてもダサイって。
あれ？　これドッキリ？　嫌がらせ？

「うーん……どうしよう？　とりあえず……」

1．開けてみる。
2．「ドラ〇えもーん！」と叫びながら開けてみる。
3．「しょうがないな、の〇太君は……」と言いながらお腹のポケットを探りつつ開けてみる。

4．「のび〇君のえっち！」と叫びながら開けてみる。
5．「オレの物はオレの物、お前の物もオレの物……」と言いながらガキ大将の笑みを浮べて開けてみる。
6．「〇び太のくせに生意気だぞ！」と言いながら真新しいラジコンを見せびらかしつつ唇を尖らせて開けてみる。

うん、見事に開けてみるしか選択肢がねぇ……。
と、言う訳で早速……。

ゴクリと生唾を飲み込みつつ襖に手を掛けた。

――スパァンッ！！

壁にしっかりとはまっている様に見えたそれは、以外にもあっさりと開ける事が出来た。と言うより、私が手を掛けるのを待っていたかの如く、まるで自動ドアのように自然と開いたのである。

そして、私の部屋は目が開けられない程の光に包まれた。

―　いきなり目の前に襖が現れたら　―
≪とりあえず開けてみました≫

1．いきなり目の前に襖が現れたら。（後書き）

まだ「ぷにぷに」の「ぷ」のじも出てこないこの一話。次のお話からちゃんと出てくるのでご安心を。
え？別に安心するほど期待してない？
えぇ、えぇ、別にかまいませんとも。何しろこの小説は作者の自己満のみで書かれた世界ですから。
どうか、ゆるーく気持ちをらくーに、軽く読み流す感じで結構です。
その上で、ほんの少しでも楽しんでいただけたのなら満足でございます。

2．気がつけば自分の体がぷにぷにになっていたよ。

目も開けられないほどの光に包まれ暫く、ようやく光は治まったようで、私はゆっくりと目を開けた。

すると目の前には色とりどりの花々が咲き誇り、手入れの行き届いた木々が存在した。

それが見渡す限りに広がっているのだから、広大な庭園と呼ぶ事ができるだろう。それはもう非の打ち所が無いくらいの見事な庭園。花や木々はもちろんの事、転がる石にまで気を掛けているのではと思うほど、全てが絶妙な配置なのだ。

一体、手入れにどれほどの人手と手間と金がかかっているのか、気になるところである。

でも、そうは思っても、その花々の見事な咲きっぷりに、私は感嘆と賞賛の声を上げ、花に手を伸ばした。

「うわー、きれーでしゅ」

……ん？

「にゃんで赤ちゃん言葉にゃの？　ほぇっ！？」

不思議な事に舌が上手く回らずに、拙い言葉使いになってしまう。

思わずバッと自分の口を押さえてみて驚いた。

なんと自分の手がちっちゃいのだ。それもなんかぷにぷにしている。

「にゃ、にゃんちゃこりゃ〜〜！！（※なんじゃこりゃ）」

庭園内に私の絶叫がこだまする。
それはもうパニックであった。なんと手だけではなく全身が縮み、そしてぷにぷにしていたのだから。
私はムンクの叫びよろしく、両手を頬に当てふにふにとその感触を確かめた。

「あ、でもにゃにこれ、きもち〜〜」

この世に生を受けて初めてのその感触。

嗚呼、なんかこれ癒し系じゃね？　特に頬っぺたの感触は意識とぶって！

私はそのあまりの心地よさに、その手を離す事ができなかった。

―　気がつけば自分の体がぷにぷにになっていたよ　―
≪とりあえず感触を楽しもう≫

2．気がつけば自分の体がぷにぷにになっていたよ。（後書き）

ビバぷにぷに！

次回はぷにぷにな住人達が！？　こうご期待！

3．この世界にはぷにな人々しかいないようです。（前書き）

ぷにぷに王国の住人登場。

3．この世界にはぷにな人々しかいないようです。

「おみゃ～は誰じゃ！？」
「……（プニプニ）」

なんか声を掛けられているような気がするけど、今はそれどころじゃねぇ！　この癒しの感触を思う存分堪能せねば！
嗚呼っ、頬っぺた有り得ない位すっごいふにふにぃっ！！
やっべ、とまらねぇ。

「おいっちゃ、オリャを無視するんじゃなきゃ！」
「……（プニプニ）」
「うにょ？　こんな所でどうしたにょ？」
「どうしたもこうしたもないみゃ！　こいつオリャを無視するんだじょ！」
「えぇ！？」
「……（プニプニ）」

これはもう、癒しを通り越して軽く兵器にもなるんじゃなかろうか？
どんな屈強な兵士も、この癒しの感触を前には触らずにはいられまい。
戦場であれば、誰も彼も武装解除して群がってくるに違いない筈。

……。

すげぇ！　すげぇよそれ！　世界から戦争なくなるよ！？　ノーベル平和賞もんだよそれ！

「ホ、ホントだにょ！　それに自分の頬っぺたを一心不乱にふにふにしてるぅ！　なんか怖いぃ！」
「泣くじょ！　それ以上無視されたらオリャ泣くかんな！」
「おまけにうっすら笑ってて、ますます怖いにょ！　怖すぎて泣きそうだにょ！」
「……（プニプニ、ニタァ）」
「う、嘘じゃねーじょ！　ホントに泣くかんな！」
「僕も泣くにょ！」
「……（プニプニ）」

「うわ～～ん！！」×2

つーかさ、今自分てどんな姿なんだろう。
やばっ！　見てえ！　すっげぇ、見てえ！！
全体像がめっちゃ気になる！
鏡何処だ、鏡！

私はそこで漸く周りを見渡したわけだけど、目の前に大泣きしているコロボックルが二匹。
一匹はツンツンとはねた茶色の髪をしたコロボックル。
もう一匹は流れるような真っ直ぐな青い髪をしたコロボックル。
二匹とも、玩具の様な剣を腰に差し、鎧の様なやはり玩具の様な物を身に纏っている。

なんだ？　勇者ごっこでもしているのか？

それにしても二匹とも見事な二頭身である。それにやはりぷにぷにとしている。

て言うか可愛い。二匹ともすっげ可愛い。

クリクリ円らな目にふくふくのマシュマロほっぺ。ポコンとしたお腹。

あ、茶色い子はなんか頭に動物の耳が付いてる。猫とかそういうんじゃなくて、丸い控えめな耳。

そう、テディベアの様なクマさんの耳……と思ったけど、よく見ればお尻に尻尾が付いている。

細長くて先がもさっとしてる……あ、これライオンだ。

何だそれ、このなコロコロ可愛くてライオンって……百獣の王って……なにこのギャップ萌え。

あ、今度は地面に転がってじたばたしてる。

鼻血出してもイイデスカ？

そうこうしている内に、このに二匹のコロボックルの泣き声を聞きつけたのか、別のコロボックルがわらわらと出てきた。

何このぷにな集団。

髪の色は様々で、やはり頭に動物の耳を付けた者もちらほら。

中には虫の様な触角とか羽を付けたのもいるみたいだ。

何だそれ、妖精？

二匹と同じように鎧を着ている者もいればメイドさんの様な服を

着ている者もいる。料理人の格好をしている者もいれば、庭師のような姿の者も。
とにかく職種は様々である。

そして皆共通するものと言えば、

1. ニ等身。
2. ぷにぷに。
3. コロボックル。
4. すっげ可愛い。

何なんだこの集団。
戦場に連れてったら、武装解除どころか国を明け渡してくるんじゃね？

え？　何それ世界征服？

見た所、普通の人間は一人もいない。
どうやらここは、コロボックルの世界のようである。

―　この世界にはぷにな人々しかいないようです　―
≪ここにはコロボックルしかいないの？人間は？と訊いたら何それ美味しいの？って言われました≫

3．この世界にはぷにな人々しかいないようです。（後書き）

主人公はどうやら自分にも萌えてしまうようです。←すごいね、ぷにぷに！

これからも、ぷにってぷにってぷにまくるぞっ！

因みに、彼らは自分達の事を「コロボックル」ではなく「ぷに」と呼んでいます。

4．国の名前はぷにぷに王国（前書き）

合言葉は「ぷに！」←定着させたい……。

4．国の名前はぷにぷに王国

どうも、家に帰ったら不自然に怪しい襖を見つけてまんまとそれを開け、気が付いたら不思議に素敵で可愛いコロボックルの世界に迷い込み、そして自分自身もコロボックルになってしまった主人公、そう私です。

コロボックルでなく、彼らはぷにで通用するみたいですけど。

おまけに1ぷに2ぷにって数えるんだぜ！　可愛くね！？

目の前には様々なぷに達に囲まれ、いまだに泣き止まないライオンぷにと青いぷにがいます。

あ、集ってきたコロボックルたちが泣いてるコロボックルを慰めてる……って言うか皆でほっぺたやらお腹やらをぷにぷに押してる……うん、擽ってる？

二匹のコロボックルがいい具合にくすぐったがってコロコロしてるんですけど？

え？　なにそれ？　私も混ぜて？

私も一緒になってツンツン突っついてみたら（思った以上に柔らかかった！）、「お前案外といい奴だぎゃ」とライオンのコロボックルが私に頬っぺたを摺り寄せてきた。

何この子、可愛いんですけど！？

思わず鼻血を吹き出しそうになると、もう一匹のコロボックルも、「レオンばっかりずるいにょ！」とか言って同じように頬っぺたを摺り寄せてきた。

え？　何このサンドイッチ？　美味しすぎて鼻血吹くんじゃない？

そっか、このライオンの子レオンって言うのかぁと思う暇もなく、僕も私もと他のコロボックルたちも参戦してきやがりました！

けしからん！　けしからん感触ですよ、これ！

私は今、前後左右あらゆる所からプニプにほにょほにょ攻撃をされている！　なんて攻撃だ！

このまま昇天しても悔いは無し！　って言うかこのまま天にめされてもイイデスカ？

今なら間違いなく笑って逝けそうである。

その後、思う存分うにぷに攻撃しまくった彼らは漸く落ち着いて、数多くいたぷにの集団は離れていった。

私はレオンと呼ばれるライオンぷにに、「ここはどきょ？（ここは何処？）」と訊ねた所、

「ん？　おみゃは何処の田舎もんだ？　ここはぷにぷに大国だぎゃ！」

うん、まず君は何処出身？　何その訛り。何処まで私をギャップ萌えさせれば気が済むの！？

って言うか、ぷにぷに！？　ぷにぷに王国！？　何そのぴったりなんだけど安っぽい名前。

もちょっとこう……うーん、やばっ、ぷにぷにしか思いつかない。

だって周りには私も含めてぷにぷにしか居ない。見た目も感触もバッチリである。

まさにぷにぷにの国、ぷにぷに王国！

―　国の名前はぷにぷに王国　―

≪ころころ王国でもいいかもと思ったら、ころころ王国は別にあるそうです≫

4．国の名前はぷにぷに王国（後書き）

ぷに！

→なんだこれと思われる方、これは挨拶です。

主人公の名前は敢えて触れない様に書いています。読者様と主人公を置き換えやすくと考えてのことです。

でも、今後名前なしじゃ厳しいってなるとあっさり名前出すやも知れません。

うーん、そこんところはどうなるんだろう？今の所は大丈夫なんだけどなぁ……。

では、ぷにぷに！

5．私の体はコロボックル仕様。

「王様が会いたいって言ってるにょ！」

おや、君は青いぷに君。なんか姿が見えないと思ったら王様に会って……え！？　王様！？　王様って王様って……一国の主様とそんな簡単に会ってもいいの！？

私めっちゃ不振人物だよ！？　王様もぷにってるのかな！？

「んじゃあ早速会いに行くぎゃ！」

「王様の部屋まで案内にょろ！」

戸惑っている私を、レオン君と青いぷに君が引っ張ってゆく。仲良くお手手を繋いで。

彼らの手はちっちゃく（私の手も同様だけど）温かくてよく見るとちゃーんとちっちゃいちっちゃい爪も生えている。赤ちゃんの手とはまたちょっと違うけど、何だか胸がこそばゆくなってくる。

こんなふうに誰かと手を繋いで歩くのなんて何年ぶりだろうか。

うーん、ムズムズこそばいって言うか、胸がきゅんきゅんするんですけど！？

ハッ！　ちょっと待って？　恐らく私も彼らと同じ様にコロボックルになっている筈だから……。

私はころころっとしたコロボックルが三匹仲良くお手手を繋いで歩いている様を想像した。

ぶはっ！！　カメラッ！　カメラは何処ですか！？
有り得ないほどラブリーでファンシーな絵面な事間違いなし！
だれかぁ！　ここに素晴らしい被写体がいますよー！！

「あ？　おみゃ、どうしたぎゃ？」
「なんかプルプル震えてるぅにょ」
「ハッ！　にゃんでもにゃい！」

クリクリとして目で此方を不思議そうに見てくる彼らに首を振る。
危ない危ない。涎が出るところだった。
それよりも私のこの言葉遣いは何とかならんのかな？
舌が思うように動かないだよね。ちっちゃ過ぎると言うかなんと言うか……頬っぺたも柔らかすぎて思うように口も開かないし……。
「なにぬねの」が「にゃににゅにぇにょ」に……さ行も言えないなこりゃ。
客観的に見れば可愛いんだろうけど、自分自身がなると微妙だよなぁ……。
つーか、普通に可愛いとか思っちゃったけど、自分のコロボックル姿って如何なの？　こいつらみたく可愛いもんなんだろうか。
うーんまぁ、深くは考えずに今を楽しんじゃえ☆
言葉遣いもこれがコロボックル仕様なんだと思えば何とか受け入れられるし。
あー、ならこれもコロボックル仕様なのかな？　ありえないもんな、こんな二頭身で、頭でっかちにも拘らず頭が重くないって言うのは。普通こんなに頭が大きかったら、頭を地面に引きずるようだもんなぁ。
うん、そうだ。そういう事にしよう。深く考えるのは止そう。

私はそのようなことを自分自身に言い聞かせて、今の状況を無理やり納得させたのだった。

―　私の体はコロボックル仕様　―

≪私はその時、現実逃避していたんだと思います≫

5．私の体はコロボックル仕様。（後書き）

戸惑う必要など無い！　ただぷにればいいだけ！

6．あのジブリの名作が国歌になるかもしれません。

それから私達は広い庭園内を歩いて、お城に向かう。
その合間、私達はお喋りをしたり歌を歌ったり。
歌はあのジブリの名作だったり。
何気に「あるこーあるこー♪」と歌い出したら彼らも興味を示してきたんだよね。そんでもって教えてあげたら物凄い悦んでいました。

「なんて心に染み入る歌だぎゃ！」
「すばらしいぅにょ！　ぜひとも皆にも教えて国歌にするにょ！」
「えぇ！？」

うん、変な感じで悦んじゃったな。本当にこのまま国歌になっちゃったらどうしよう。
私は大勢のコロボックルたちが厳粛な場でジブリ名作を歌っている様を思い浮かべた。

……。

うん、どうしよう。すっげお似合い。更に皆で足踏みしながらだったら尚いい……。

「あ、またプルプルしてる！」

「どうしたぅにょ？」
「ぜ、ぜひともこの歌を国歌にしてくだしゃぃ！」

私がそういうと、レオンとニール（青いぷにの名前。さっき教えてもらった。ついでに言うと、彼は蛇だそうだ）二匹のコロボックルはびっくりした顔をしていたけど、「じゃあ王様にお願いしよう」と言ってくれました。
王様かぁ～。コロボックルの王様ってどんなだろうなぁ～。
王様ってなくらいだから、頬っぺたのぷにぷに具合も頂点に立つんだろうか。

やっべ！　どうしよう、出会い頭に王様に突進しちゃったら！

あー、それにしてもどんだけ広いんだこの庭！　まだお城につかんのかい！　とか思ってたら漸くお城の中に入りました。
すげー、意外にちゃんとしてるー……って言うか荘厳ですねー。メルヘンでファンシーなのかと思ってたらすっごい裏切られた感が否めません。まぁ、ここの庭も洗練された感じだったけど……。

……。

ハッ！　ま、まさかぁっ！！
お城がこんなだったらそれを統治していると言う王様って王様って……。
髭面のがっしりしたおっさんだったらどうしよう。おまけにムキムキマッチョだったら……。
ぬぅぉぉぉおおん！！　私そんなんだったら軽く泣けるよ？
だって想像してみてよ。
ころころプリティーなコロボックル達が戯れる中に埋もれるムキ

ムキマッチョな髭面のむさいおっさん……。

……。

うん、すぐさま吐血しそう。

「ん？　どうしたぎゃ？　顔が真っ青だじょ？」
「ぅにょ？　気分が悪いにょ？」
「だ、だいじょぶ。そ、それより王しゃまってどんな人――じゃなかくてどんなぷにぷににゃの？」

思わず真面目に想像してしまい本気で吐血しそうな私を見て、心配してくれるライオンぷにぷにのレオンと青いぷにぷにのニール。何とか誤魔化しつつ、それとなく王様の事を訊ねてみることに。
すると、彼らの顔が見るからに、パァァァと明るくなった。

「それはもうすっごいぷにぷになんだぎゃ！」
「素晴らしいおぷにぷになにょろ！」
「へ、へぇ……（おぷに！？　お人って言いたいのかな？）」

ええっと、全然わかりません。ただ彼らがすっごい尊敬していることだけは確かです。

「王様はご馳走を前にしてもよだれを流さないんだぎゃ！」
「お昼寝しなくても平気なにょろよ！　凄いにょ！」

「……」

何だその尊敬する理由。基準低くね？
つまり、レオンはご馳走を前にすると涎を流さずにはおられず、二ールはお昼寝をしないといられないと……。

……。

幼児や！　コロボックル、この子らの生態は幼児と一緒や！
ここで、人参とかピーマン食べれるよ的な事を言ったら尊敬されるんだろうか？
それだったら夜一人で寝れるとかシャンプーハット無くても頭を一人で洗えるんだぜとか言ったら崇められんでなかろうか？

……。

うん、いいかもしんない。
だって、コロボックルたちにきらきらした目で見つめられるんだぜ？　それはもうやばいっしょ。

と、ここまで考えた私ははたとある事に気付く。
彼らが言ってる尊敬する事柄って、ある程度成長した人間にとっては至って普通の事である。ますますもって、王様おっさん説が高まってきた。

―　あのジブリの名作が国歌になるかもしれません　―
《突如浮上した王様おっさん説でそれどころじゃなくなりました》

7．いきなりのシリアスモード。

王様おっさん説がいよいよ高まり、私がまたも吐血しそうになったその時。

『キャー、誰かー！！』

そんな叫びがお城に響く。

「にゃ！？　にゃににゃに！？」

突然の叫び声に私は吃驚して周りを見渡す。
思わず声を上げましたが、相変わらず舌っ足らずなのはスルーしてください。

「何事だぎゃ！？」
「ただ事ではないにょろ？」

レオンや二ールもその声に驚いたみたいだったけど、その可愛い顔をきりっとさせて警戒するように周りをきょろきょろとした。
警戒するぷに達の姿にちょっとキュン。
っと、そんな胸キュンしている場合じゃない！　いったい何事！？

パニクる私はこの一見メルヘンなコロボックルの世界でも争い事とか不穏な事が起こるのかと不安になった。
だって、やっぱりこの二人のぷにの格好からして、近衛兵みたいなもんなんだろう。玩具の様に見えるそれは本物なのだろう。何かあればそれを使って戦ったりするのだろう。
願わくば、私はそれが最初の考えどおり玩具である事を望んでならない……。
私がそんな事を考えている間も、城内は騒然として、レオンや二ールも今にも飛び出さんばかりだ。
そして、実際に二人は飛び出した。

「曲者かもしれないぎゃ！」
「ちょっと様子を見てくるにょ！」
「え？　ちょっ――」

私の静止の言葉も待たずに走り去ってしまう。
ぷにぷにと言う効果音がしそうな彼らの走りを眺めながら、その場にぽつんと取り残される私。
だが、シリアスモードに突入していた私の視線は、とある一点へと注がれる事になった。

―　いきなりのシリアスモード　―

《どうやら曲者が現れたようです》

7．いきなりのシリアスモード。（後書き）

飼い猫のちぃちゃんがが無事出産を終えたので、執筆再開です。
とは言っても、暫くは様子を見るので遅いかもです。

8．新たなぷにとの遭遇。

それはレオンと二ールが走り去る廊下の端っこ……。
なにやら得体の知れない丸い物が転がっている。
色はグレー。つやつやで硬そう。大きさは私と同じくらい。何やら節っぽい物が放射状に入っているのが見える。
それを見た私はとある昆虫を思い出した。

あれ？　これあれじゃね？
なんかじめっとした場所で、石とが枯葉の下なんか見ると出てくる危険を察知すると丸まるあれじゃね？

私はその丸い物体を暫し観察する事にした。

……。

あ、なんか動き出した。

お？　今度は上部分がパカッと開いた。

ん？　開いたはいいけど、球体部分を下にして半円状に開いてるもんだから、揺りかごみたいにゆらゆらとゆれてる……。

うん、手足ばたつかせてるね。起き上がれないみたいだね、あれ。

「う〜う〜っ！」

必死こいて唸るそれは、だんご虫のぷにだった。
ぷにぷにほっぺを真っ赤にして、手足を一生懸命動かしている様は私に鼻血を吹かせるのに十分だと思います。
それから暫しその姿に胸キュンしていた私であったが、とうとうそのだんご虫のコロボックルはべそをかき始めた。
流石に可哀相になってきたので助けてあげる事に。

「大丈夫？」
「っ！（モゾッ）」
「ああっ！　また丸まるにゃ！」

声を掛けた所すぐさま甲羅を丸めようとするだんご虫のぷにを慌てて止める。
しかしその制止も空しく彼（彼女？）はまたその名の如くグレーの団子になってしまった。

まったく……恥ずかしがり屋なのか人見知りなのか膣病なのか……その全部だったりして……。
とにかく、こんなおいしい萌え素材は放っては置けない。ぜひともお友達にならなければ！

「またそうやって丸まってもしょうがにゃいでしょ！？　起こすの手伝ってあげるから！　ね？」
「……（そろっ）」

なるべく優しい声音で話しかけてあげると、数センチばかりだんごが開いた。
その隙間から此方を窺ってる気配がするので、私は出来る限り優しく微笑む。
このぷにの表情筋がどこまで作用するのかわからないけれども、目の前のだんご虫のぷににはそれなりに働いているようで、そろそろとだんごを開いてくれた。
顔は何と言うか、だんご虫の甲羅がその頭までも覆い、それが顔半分隠してしまってよく見えない。両脇から触角のようにグレーの前髪が垂れている。
それなのに可愛さがまったく損なわれないとはどういう事だ！？
これもコロボックル仕様なのか！？

「い、いじめない？」
「……」

心細そうに言うだんご虫ぷににズキュンと胸を打ち抜かれました。
思わずその場に膝をつく私（ｏｒｚ←こんな状態です）。
鼻血を吹かなかったのは奇跡です。
目の前のだんご虫ぷには、動けないながらもそんな私を見ておろおろとしている。

うん、そんな所も萌えポイントだね☆

何かそんなだんご虫ぷにを見ていたらうずうずっとしてきた私は、徐に奴に近づいた。

「……う？」

何それ「う？」って可愛いんですけど！？　覚悟なさい！

私はこやつが動けない事をいい事に、万遍無く突っつきまくってやった。

だってだって！　「いじめない？」なんて訊いてくる時点で「いじめて下さい」って言ってる様なもんでしょうが！

私悪くないもーん。いじめてちゃんなこの子が悪いんだもーん。

ってゆーか、何この子。ものすごく悦んでない？

今もほら、「きゃっきゃっ」ってものすっげ笑顔。

何ナノ？　Mナノ？　やっぱりいじめてちゃん？

いや待てよ？　そういやレオンとニールの時もつんつんしたらいい奴だみたいに言われたような……。

他のぷに達も泣いてる彼らを見てつんつんしてたし……。

はっ！　もしかしてこうやって突っつく事が世間一般的なぷにの慰め方とか？

うーん、じゃあ頬っぺたに擦り寄ってきたあれはなんだったんだろう？　いや、気持ちよかったけどね？

頬っぺたに何か……あ、頬っぺた突っついた時が一番悦んでる。やっぱり頬っぺたに何かあるのかな？　まぁ、ぷにの中で一番柔らかいの頬っぺただけれども……。

なんて考えていた私は、だんご虫のぷにが此方をじっと見つめている事に気付かなかった。それも物凄い熱視線で。

―　新たなぷにとの遭遇　―

《コロボックルの頬っぺたには何か秘密があるようです》

9．新しいぷにに懐かれました。

ヤッフー☆
いえ～い！　前回、新しいぷにに出会ったぜい☆
何とだんご虫のぷにになんだぜ？　自分の甲羅で起き上がれなくなっちゃう様なドジっこキャラで、おまけに何かいじめてちゃんなんだぜい☆
思わず己の欲望に抗いきれずに心のままに突っつきまくってやったのさ。
そしたらば何と何と！
懐かれちまったぜい！　てへっ☆
って、ちょっとテンションあがりすぎてキャラが可笑しくなってるよ！　自重しろ、私！

てな訳で、気持ちを落ち着けつつ新しく判った事を説明するよ。
そのだんご虫のぷにの名前はニコって言うらしい。
私に助け起こされた彼（男の子と判明）は頭を覆っていた甲羅が少しばかり後ろに下がり、ちゃんとその可愛い目が見えております。
瞳の色は髪と同じグレーかな、なんて思ったけど見れば綺麗なブルーでした。
二コはそのブルーの瞳をうるうるっとさせ、頬を薄っすらと染めて私の手をぎゅっと握ったかと思うと、
「ありがとうだもん」

と言って頬を摺り寄せてきました。

ぐはっ！　萌え所満載！

なんだ「ありがとうだもん」って！　「もん」って！

何気に見た目がころころしてるから語尾が「ころ」じゃねーかと思ってたのに予想を裏切られたよ、いい意味で！

あ、そうそう。何でもこの頬を摺り寄せてくる行為は、お友達成立の証らしいです。

え？　いつお友達になってくださいと申し込んだかですって？

むっふっふ、それはね？

何と！　あの頬っぺたを突付く行為こそがそれだったらしいのです！

ついでに言えば、頬っぺた以外は相手を心の底から気遣ったり労わったりするものらしいです。

つまり私はあの時、この子に対して「大丈夫？　私とお友達になりましょう？」なんて言っていたと言う事に……。

あーうん、間違っちゃいねえ！　確かにお友達ばっち来いだ！

なもんだから、これ幸いとばかりに思いっきり此方からも頬っぺたをすりすりしちゃいましたよ。

ぷにゅるんぷにゅるんと絶妙な感触。ぷに同士の相乗効果は半端ないね！

すっげ気持ちよかったよ、げへへ。

そんな感じで、どうかと思う笑いを浮かべた私。そしたらこの子ったら「だ、大胆だもーん！」とか言って真っ赤な顔でおたおたしだした。
んでもって、おたおたした拍子にひっくり返ってまたもやじたばた。

うん、お約束だね☆

というか……え？　何その反応？
だって、頬っぺたすりすりはお友達成立の証じゃん？　そう言ってたじゃん？
その前に君が散々すりすりしてきたじゃん？

……ハッ！　もしかしてこっちからするのって、ぷににとっては破廉恥行為だったり？
うっわー、やっべ！　私ヘンタイぷにになっちゃう！

……。

あれ？　それって間違いじゃなくね？
ぷにに対してめちゃくちゃ鼻血噴いてるじゃん私。
半端なく胸キュンしてるし見てるとなんだか息も荒くなってくる……うん、ヘンタイ決定。
やばっ！　ぷに達逃げて！　ここにヘンタイがっ！

と、その時である。
私の手にぷにっとした感触が。

見ればニコが自力で起き上がって、さっきのように私の手を両手できゅっと握っていた。

ちっ……また思う存分突っつきまくってやろうかと思ってたのに……。

視線を上げていけば、さっきよりも頬っぺたを赤く染めて、くりっとした潤んだブルーの瞳に、若干熱が篭っている様な……。

ぅおーい、今の私やばいぞ！？　君ぃ！　これ以上ヘンタイに近づいちゃいっかーん！

のり巻いちゃうぞ？　その餅よりももちもちの頬っぺたにのり巻いて、みよーんとの伸ばして食べちゃうぞ？

磯　辺　焼　き　の　様　に　！

きっとどこまでも伸びる事だろう。

美味しいよね、磯辺焼き。

と、そんな事を考えていると、私の手を握るにニコの手に力がこもって、私を現実に引き戻した。

なんだかニコの表情が若干きりってしているような……？

どうしたのかと訊こうと思ったその時、彼の可愛い口が言葉をつむぐ。

「結婚式はぷにぷに様式ところころ様式どっちにするもん？」

「……」

あるりぇー？　なんか今、結婚式とかって聞こえたぞぉ？

つーか、ぷにぷに様式ところころ様式って何やねん！

―　新しいぷにに懐かれました　―

≪懐かれすぎて結婚話にまで発展してしまいびっくりです≫

１０．この世界の犯罪はとても軽いと分かりました。

「結婚式はぷにぷに様式ところころ様式どっちにするもん？」

なーんて言われちゃいました、どーも私です！

言われた後しばらくは（どーゆーことぉ！？）とパニくって石の様に固まっておりました。

その間も、だんご虫ぷにのニコは色々と私に語りかけていたのですが私の頭には入っておりません。何か適当に相槌だけは打っていたのは覚えています。

そして気付けば私たちはお城の廊下の隅っこに仲良く並んで座っており、手には何故かクリームたっぷりのケーキがありました。

それはニコの手にもあり、どうやら半分こされているようです。

ですがどうしたことでしょう。私の目の錯覚でしょうか？

ニコの手の中にあるケーキの方が　明　ら　か　に　大きいような？

そしてそっちにだけ真っ赤に色づいたぷりぷりつやつやのでっかい　い　ち　ご　が乗っているような？

いえいえ、別に私が食い意地を張ってその様に言っている訳ではございませんよ？（甘い物大好きだけれども……フルーツの中では苺が一番大好きだけれども……）

ただね？　こういう場合は、仮にもプロポーズした相手には、で

かい方を譲るもんではなかろうか？

「う？　僕がそっちでいいもん？　って訊いたら、いいって頷いていたもん？」

あれ？　もしかして口に出して言ってた？
て言うか、私が茫然自失としていた時かぁ！　曖昧に相槌を打っていた時にそんな質問するなんて、確信犯めぇ！

「う？」

くぅぉぁぁぁああ！　な、何だね君は！
その「う？」って！　首を傾げてのおまけにちっちゃい口でケーキを頬張るからぁ！　リスみたいに頬っぺた膨らんでるしぃ！　クリームもそんなにくっつけてぇ！
母性がっ！　なまじ赤ちゃんっぽい外見だから、私の奥底に眠る封印されし母性が目覚めるっ！！

んな事されたらっ、んな事されたらぁ！

「もうしょうがにゃいなぁ……」

とか言って、ハンカチ取り出して君のぷにぷにのほっぺについたクリームを拭ってしまうじゃないかっ！

そうしたらニコが、

「ありがとうだもん！」

とか言って、恥ずかしそうに照れた笑みを浮かべて、

「そっちこそ付いてるもん」

なんてニコが私の頬っぺたに付いたクリームを拭ってくれて……。

……。

ありぇー？　これ今まさにしてねぇ？　そんでもって、何か物凄く甘酸っぱくねぇ？

え？　え？　何これ！？　何か物凄くときめくんですけどっ！？

萌えとは違う胸キュンが！

ぷになのにっ！？　ぷに相手なのにっ！？

ああっ！！　恋愛の経験値が無いばっかりにっ！！

このままじゃ、ぷにぷにだかころころだか訳の解らない様式で結婚式を挙げる事にっ！！

そんで愛を誓ってコロボックルの世界に永住か！？

……。

何でだろう、嫌じゃない……。

もう少し、この甘酸っぱい感じを体感したいような……。

ああっ！　恋愛経験が無いばっかりに！
こんな所で経験値をあげようって魂胆か！？
せこいっ！　我ながらせこいよ私！！

そんな訳で、このまま話をしてみることにしました。

「ねぇ、ニコってころころ王国から来たんだよね？」
「そうだもん。王様から言われてきたんだもん」
「ふーん、どんな王様にゃの？」
「パンダだもん」
「ふーん、パンダかぁ……」
「宰相様はレッサーパンダだもん」
「……」

パ、パンダだとぅ！？
今さらっと聞き流そうとしちゃったけど、何その王様、物凄く見たいんですけど！？　それにレッサーパンダって……。
確かにどっちもころころっとしているけれどもっ！
それに何より、王様から言われて来たって言ってたけど、ニコって何気に偉い地位のぷになのか！？

「ち、ちなみに、王様ににゃんて言われて来たの？」
「ぷにぷに王国の王様は、どんなおやつを食べてるか調べてこいって言われたもん」
「……」

私は思わず自分の手元にあるケーキを眺めていた。

い、いやいやいや！　コレがまさかソレだなんて、ねぇ？

あははーと乾いた笑いを漏らしながら、私は訊ねてみる。

「しょ、しょれで、どんなおやつって報告しゅるの？」

「クリームたっぷりの大きな苺の乗ったとっても美味しいショートケーキって報告するもん」

って！　まさにコレじゃねーかぁぁぁぁぁぁ！！

ソレがコレだったよぉぉぉぉぉ！！

「さっきはうっかり見つかって、危なく捕まる所だったもん」

こいつが曲者かぁぁぁぁぁぁぁ！！

レオン、二ール！　ここにあなた達の追っている曲者がっ！

「捕まったら、頬っぺたつねつねの刑に処せられるもん。僕、そんなの耐えられないもん」

軽っ！！

何だその軽い刑は！？

ニコ、想像してるのか頬っぺた押さえてプルプルしてるけれども。
んでもって顔を青くして涙目なんだけれども。
それ見て萌えっとなんかしてないんだからねっ！　勘違いしないでよねっ！

―　この世界の犯罪はとても軽いとわかりました　―
≪ツンデレなセリフを言う自分はとても寒いと感じました≫

11．S心と秋の空は移ろいやすい？

どうも！　前回、何やらニコが曲者の正体だと判明し、捕まったら“頬っぺたつねつねの刑”だと恐がっているニコに（萌えっとなんかしてないんだからね！）と迂闊にもツンデレってみた自分に思いっ切り引いていた、そう私です。

さっきまでぷるぷると震えていたニコも、漸く落ち着きを取り戻したようで、良かった良かった。

やっぱり頬っぺたを突っついてあげたのが良かったみたい。

ポッと頬を染めてはにかみながらも嬉しそうにしていたのには、ズキュンとやられたけれど。

あれ？　でも、確かこの行為って友達になりたい意思表示だったはずだよね？　お友達以上の関係（一応）の今ってどうなの？　どうなるの？　うーん、ま、いっか。

それよりもニコが曲者だったとは……。

罪状は……摘み食い？

あるりぇー？　何か私も一緒に食べちゃったけど、これって共犯になるんだろうか？

むむーんと考えていると、ニコが急にハッと顔を上げて、

「ハッ！　誰か来るもん！　結婚式の話はまた今度にするもん！」

とか言ってギュルンと甲羅を丸めて、見事な灰色のボールになる。

そしてボールになったと同時に、息を切らせたレオンとニールが戻ってきた。

「待たせたぎゃ！」
「こんな所に置いてきぼりにして、ごめんなさいにょろ！」

二匹のコロボックルはすまなそうに眉を下げていた。ものすっげキュンときた。

「ううん、大丈夫。親切な人……いや、親切なぷにが話し相手になってくりぇたにょ」

チラと廊下の端っこに丸まったニコを見ながら言う。
あ、今少しピクッと動いた。
いや、あのね。別にバラそうとか思ってないから。
私の予想だと、絶対大丈夫だと思うんだよね。
だってニコすっごい自信たっぷりに丸まってたからね。
それに、ここが私の常識を凌駕した場所って言うのと、どんな反応するのかとか興味もあったし、バレたとしても刑軽そうだし、そして少しばかりのS心？

「ふーん。それでその親切な奴は何処に行ったぎゃ？」
「此方からもお礼を言いたいにょろ」

レオンもニールもキョロキョロと辺りを見回すけれども、灰色の丸い物体が視界に入ったにも拘わらず、完璧にスルーした。
やはり私の予想通りだった。

すごいな、ぷにの認識能力……。こりゃあれだな、隠れ蓑の術とか言って、壁と全く違う柄の布で隠れても見つからなさそうだな。

……。

え？？　何そのベタコント？

きっとニコは甲羅の中で得意満面となっている事だろう。
それを想像したら、また私のＳ心がざわつきました。

「それで、レオン達は曲者は捕まえられたにょ？」

おうおう、ニコってば今ビクってなったよ。おもしろーい。（↑ひでぇ）

「それがおいら達が行った時には、既に逃げた後だったんだぎゃ」
「本当逃げ足が早い奴にょ！　見つけたらただじゃおかないにょろ！」
「そうだぎゃ、頬っぺたつねつねの刑だぎゃ！」

ああ、震えてる！　ニコってば震えてる！
それなのに何故気づかないぷに達よ！
でも何これ、すっげ楽しい！

「そんなに頬っぺたつねつねの刑って怖いにょ？」

「何言ってるんだぎゃ！　怖いに決まってるんだぎゃ！」
「そうにょろ！　絶対そんな刑受けたくないにょろ！！」

おおぅ、レオンもニールもさっきのニコみたいに頬っぺた押さえてぷるぷるしてるよ。涙目萌えっ！

「わたちもっと怖い刑知ってるよ」

ここで私のS心に火がついた。
レオンとニールもビクビクとしながらも興味を示している。
おまけにニコも、ピタッと閉じていた甲羅を少しだけ開けて此方を伺っている。
ますますS心が燃え上がるじゃないか！
私は彼らに聞こえる程度に声を落として言う。

「それはね、パッチンの刑って言うにょ」
「パッチン？」
「聞いた事がないにょろね」
「うん、滅多に執行しゃりぇにゃい（されない）刑だかりゃ。だけど、本当に悪い事をしたぷににだけ、この刑は執行しゃりぇる（される）……」
「ど、どんな刑なんだぎゃ？」
「き、気になるにょろ」
「……」

ゴクンと喉を鳴らしたレオン達。ニコもいつの間にやら私のすぐ後ろにやってきて話を聞いている。
ああ、ニコってばもろにレオン達の視界に入ってるのに……。よく見りゃ、ふるふると震えてるのに……。
何故気付かない！？
いや、面白いけど。
むしろ、そんなぷに達の認識力の低さは、私の萌えセンサーを著しく刺激するけれども。
私はさっきから萌え萌えして床を転げ回りたい衝動を必死に押さえ、彼らに説明を開始する。

《ぷにのぷにによるぷに達の為のパッチン講座》

1．適度な長さの紐数本と、紐と同じ数の洗濯バサミを用意しよう。（数は受刑者の犯罪の数だけ用意しよう）

2．洗濯バサミに紐を括り付けよう。（洗濯バサミから紐が解けないようにしっかりと縛り付けようね）

3．次に受刑者の罪状を読み上げると共に、一つづつ洗濯バサミを受刑者の頬っぺたに挟んでいこう。

4．洗濯バサミを全部頬っぺたに付け終わったら、最後の仕上げに洗濯バサミに付いた紐を一斉に力一杯引っ張ろう。

『ぎゃぁあああー！！』

レオン達が頬っぺたを押さえて叫んだ。
３のあたりから、彼らの目がキョドり始めたけど、私の思惑通り４の最後で見事に全員反応してくれた。
みんな涙目である。

ちょっとやりすぎたかな、尋常じゃない怖がりようなんだけど。
怪談話なんて目じゃないね。
レオンなんてその場で縮こまってガタガタ震えてるし、ニールは涙を流しながら「うあぁぁーん！！　頬っぺたが！！　頬っぺたがー！！」と泣き叫んでいる。
ニコは震えてはいないが、甲羅の隙間から液体が流れている。微かに「シクシク」と聞こえる事から、泣いているようだ。

どんだけ！？　どんだけ頬っぺた大事なの！？
つーか、何この子達。
萌えー！！　怯えて泣いてる子達、萌えー！！

ああ、なんかこの城にいるぷに達全員集めて今の話してぇー！！
大集団で怯えているぷに達が見てみたーい！！

―　Ｓ心と秋の空は移ろいやすい　―
《移ろいやすいと言うかぷにだからこその湧き上がるＳ心だと思う》

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3436s/

ぷにぷに王国の迷い人

2011年10月1日10時15分発行